
フラグメント！

終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フラグメント！

【Nコード】

N5462F

【作者名】

柊

【あらすじ】

賢者の欠片。それは魔術師の力の源である魔力を何倍にも増幅させることのできる幻の魔力増幅具。なぜかそれを体内に持つ龍宮正司は、命を狙われることとなる。リンの任務。真姫の決断。そして正司の想い。

FILE00：プロローグ（前書き）

小説家になろうに掲載させていただくのはかなり久しぶりです。この小説は一年ほど前に書き上げたものを加筆修正しています。至らない部分もあると思いますがよろしくお願いします。

FILE 00：プロローグ

扉をノックするとすぐに返事があった。

「入れ」

ノックした少女はそれに従い、ノブを捻って中に入る。

室内には応接用のソファとテーブルが一組。それと、本がびっしりと詰まったいくつもの本棚。部屋の奥に設置された、大きな執務机では白人男性が、書類に目を通していた。

部屋の中は清掃が行き届いていて綺麗だが、執務机の上だけは書類が散乱している。

その執務机のすぐ前まで少女は歩いていき、

「大佐殿、参りました」

彼女は直立不動で言った。

「早速だが、少尉。任務だ」

大佐は何の前置きもせず、そう切り出した。

「はっ」

少尉と呼ばれた少女の顔が、自然と強張った。

任務内容は本来なら作戦指揮官が伝えるのだが、それをわざわざ大佐自らが説明しているのだ。それから考えて、任務の内容が単純ではないことは、少女には容易に想像出来た。

大佐はファイルケースから一枚の書類を取り出し、それを少女の前に置いた。

「まずは、これに目を通してくれ」

「はっ」

彼女は机に置かれた書類を手に取り、上から下へと目を走らせる。その書類には少女と同じく、まだ少し幼さを残した東洋人の少年

の顔写真が貼ってあった。

その書類には他に、少年の名前や住所、血液型、生年月日、身長、病歴などのさまざまな個人情報に記載されている。つまるところ、この書類は経歴書だった。

外見や経歴からして、特に不審な点はない。ただ唯一、両親を亡くし、その後の面倒を見てくれた祖父も亡くなり、今は親戚の叔母が保護者代理という点が、特異と言えば特異だった。

それでも一見して普通の少年が、任務とどう関係あるのか、少女には理解出来なかった。

「この少年がどうかしたのでありますか？」

一通り書類の内容を確認してから、少女は大佐に尋ねた。

大佐の顔つきが陰しくなる。

「これより先の話は、一部、トリプルエーランク A A A 級事項——最重要事項に該当する。任務内容についてはもちろん、今日この時間に私と面会していたことについても、一切の口外を禁ずる。いいな？」

少女のような、一介の尉官でしかない兵士に、A A A 級の情報が公開されるというのは異例のことだった。

そして、作戦指揮官ではなく、大佐がじきじきに任務について説明する理由は、A A A 級機密事項にあったのだ。

A A A 級機密事項は下士官はおろか尉官や、佐官ですら知らされないこともある。A A A 級機密事項の取り扱いは厳しく、書類でのやりとりは禁止され、データも何重にもプロテクトがかけられる。さらには情報を持った者同士の面会についても、記録は破棄され、その時刻にその場所には存在していなかったことになる。これは、誰が情報を持っているかというのを隠蔽するための処置だった。ここまでする理由は、A A A 級機密事項というのは漏洩すれば、彼の組織の存亡を揺るがすような、事態になる可能性すら秘めているからだ。

少女はそのことを知っているため、これまでにないくらい顔を引き締め、

「はっ」

機敏な敬礼を見せた。

「任務について話す前に、一つ確認がある。少尉は確か日本語を使えたな？」

「？ 両親が世界魔法機構日本支部に配属されていたので、その間、日本に住んでいました。日常会話くらいなら問題ありません」

彼女は少数ながらも、軍に所属している日本人の友人と会話をする時は、積極的に日本語を使うようにしていたし、日本に配属されることになった友人に日本語をレクチャしたこともあった。だから、彼女は日本を離れて一〇年ほどになるが、日本語が錆付くことはなかった。むしろ、上達しているほどだ。

「ならば問題ない。今回の任務は簡単に言えば護衛任務だ。だが、事はそう簡単ではない。賢者の欠片というのを知っているかね？」

「詳しいことは解りませんが、確か、伝説級の魔力増幅具というのは聞いたことがあります」

「その通りだ。賢者の欠片は伝説級の魔力増幅具の一つで、魔力を数倍にまで増加させ、魔法の威力も格段に高めることが出来ると言われている。……では、ここからが本題だ。これは公にはされていないことだが、今から一〇年前、賢者の欠片を守っていた一族が何者かに襲撃を受けた。そして、それ以降、賢者の欠片の所在が解らなくなってしまうのだ。強奪されたのか、賢者の欠片を守っていた一族がどこかに隠したのか、どさくさに紛れて行方不明になったのか……。それはここ一〇年間、誰にも解らなかった。賢者の欠片を守っていた一族の生き残りというのは、もうこの世に一人しかないからな。しかも、当時は幼かったため、襲撃にあった時のことを覚えていない。だから、誰もが賢者の欠片の行方は永遠に解ることとはないだろうと思った。しかし、つい先日、賢者の欠片があるかもしれない場所が解ったのだ」

「それは、確定情報ではないのですか？」

大佐は言った。

「確定情報ではない」

あるかもしれないだけ。本当にあるのかもしれないが、ないのかもしれないのだ。こういうあやふやで、先の見えない任務ほど、兵士にとって過酷なものはない。

「場所が場所だけに、あるかどうかの完全な断定は困難なのだ。しかしながら、我々としては、この件を見逃すわけにもいかない。もし、万が一、敵がその情報を掴み、賢者の欠片が悪の手に渡るようなことになれば、大変な事態になるだろう。特に、アブソルのような超過激派の手に渡れば、テロ行為などに使用されることは必至だ。そうなった場合、アブソルとの全面戦争が勃発するのではないかとすら、最高評議会の議員らは危惧している」

全面戦争という言葉に、彼女の顔に緊張が走った。現在のところ、活動が活発化してきているとはいえ、アブソルとは小規模な武力衝突しか起きていなかった。それでも互いに死者を出している。もしも戦争ということになれば、この何倍もの血が流れ、何人もの死者を生むのだ。しかも、それは自分の任務の成否に直結するかもしれないとなれば、否が応にも、少女は責任を感じた。

「事の重大さはよく解りましたが、賢者の欠片の在り処と、この少年にどういう関係があるのですか？」

「私としても、信じ難い話ではあるのだが、その写真の少年の中に賢者の欠片が埋め込まれているらしいのだ」

「体内に埋め込まれているって……そんな、自殺行為じゃないですか。世界魔法機構できちんと調査はしたのですか？」

賢者の欠片を体内に取り込むというのは、自殺にも等しいことだった。血液でも、違う血液型の血を輸血すると拒絶反応が起こるように（O型など特別なものもあるが）、魔力においても性質の違う魔力が体内に入り込むと、拒絶反応を起こすのだ。特に賢者の欠片のような、人の魔力とは性質がまったく異なる魔力の場合、その拒絶反応の症状というのは重くなる。普通なら死に至ってもおかしくはないのだ。

「そもそも、その情報源というのは信頼の出来るのですか？」

「君のその質問はA A A級機密事項であり、このことについて君には知る権限がない。それに、私にも知る権限がないのだ。情報源についても、調査内容についても一切知らされていない。だが、調査の結果、評議会はこの情報に信憑性があると、決定付けたのだ。そうなれば、我々はその決定に従うしかない。君としても、情報が教えられないのは不本意ではあるかもしれないが、それが組織というものなのだ」

「申し訳ありませんでした」

「確かに賢者の欠片を体内に取り込むということは、自殺にも等しいことだ。だが、彼は代々賢者の欠片を守り抜いてきた家の末裔でもある。何らかの事情により、拒絶反応が起きないのかもしれない。彼の魔力が賢者の欠片の魔力と相性が良いのか、それとも性質が似ているのか、はたまた別の理由があるのかは解らないがな。もしかしたら、その少年は特別な存在なのかもしれん」

「は、はあ」

少女は納得のいったような、いかないような声で答えた。

「それでは、君に正式に辞令を通達する。心して聞け」

「はっ！」

「ウィンリィ・フォン・シュバイツァー少尉。君は明後日の八月二〇日にイギリスを発ち、日本へ向かえ。日本に入国後は、速やかに目標の護衛にあたれ。もしも敵勢力と遭遇した場合には、交戦を許可する。迅速に敵勢力を排除し、目標に被害が出るような事態だけは避ける。それから、すぐには君の住居を用意することが出来ない。それまでは、目標の自宅近くにある旅館を使うように。それと、作戦行動中の君のコードネームは、フラグメント1となる。……説明は以上だ。護衛するにあたり、何か質問はあるか？」

「目標に我々のことや、任務の内容は知らせるのですか？」

「それは君に一任する。君が護衛するにあたり、効率がよくなると判断したら説明しろ。ただし、不信感を抱かせるようなことだけは

避けるように。不信任を抱かせてしまえば、護衛任務はより困難なものになるだろう」

大佐の言う通りだった。不信任を抱かせてしまえば、護衛任務は難しくなるだけだった。相手が女性で、護衛する人間が男だった場合、ストーカーとして警察に突き出されかねない。だったら、目標には護衛のことを打ち明けないほうがいいだろう。

「他に質問は？」

「もう一つあります。護衛任務は私一人で行うのですか？」

「出来るだけ早く人員を補填するつもりだが、当面は君一人で行ってもらうことになる。君も当然知っていることと思うが、最近になってアブソルの活動が活発化してきているのだ。世界魔法機構をあげて彼らの対応にあたらなくてはならない。そのため、今すぐに人員を割くことが出来ないのだ。とはいえ、彼の中に賢者の欠片があるという情報は、A A A級機密情報だ。つまり、敵がこの情報を手に入れるのは非常に困難なわけだ。だから、そうそう敵との戦闘になることもないだろうし、そうならないことを願っている。目標はあと二週間ほどで夏休みを終える。そうすれば学校が始まるため、護衛は比較的楽になるだろう。いろいろと大変だと思うが、少しの間、一人で頑張ってくれ。すまないな」

大佐は頭を下げた。

「いえ。とんでもありません」

「他に質問はあるかね？」

「特にありません」

「そうか。では、以上だ。下がっていいぞ」

「失礼します」

FILE00::プロローグ（後書き）

閲覧ありがとうございました。感想などありましたらおねがいします。

FILE 01..ボーイ・ミーツ・ガール1

第一話 ボーイ・ミーツ・ガール

東京郊外にある多摩村霊園。

日付はとうの昔に変わり、今の季節なら日の出まで三時間ほどだ。多摩村霊園に入っただけにある杉の巨木の近くで、龍宮正司は待ち合わせ相手を待っていた。

とくにいじってあるわけでもない短い髪の毛。背丈は平均より少し高めで、体型も多少は筋肉質ではあるものの平均並だ。いたってどこにでもいそうな、そんな普通の少年だ。

彼は虫の集まる外灯の明かりを頼りに腕時計と睨めっこをしていた。

「遅いな」

彼の口調には苛立ちの影が見え隠れしていた。待ち合わせ相手が現れないということよりも、墓場という環境的な要因によるものが多いのだろう。

「キャッ！」

ふいに響いた悲鳴。次の瞬間には何かが地面に転落した音。

突然のことに正司は身を強張らせたが、すぐにそれが待ち合わせ相手のものだ気が付いた。

砂利道を駆ける音はすぐに消え、ゆっくりと踏みしめる音になり、それも消えると一人の少女――椎名真姫が正司の前に立っていた。

肩よりも少し下で切り揃えられた黒髪。端正な顔立ち。それを薄化粧が更に良い具合に装飾していた。リップが塗られた薄桃色の魅惑の唇は、外灯の光に晒されて艶やかな輝きを放っている。

服装はロングのTシャツに膝下まであるスカート。これが正司の

知るいつもの彼女の服装だった。スカートがミニスカートになったりということはあっても、彼女は制服でも私服でも、たとえ猛暑であろうとも絶対に長袖を着用していた。そこが普通の人とは違っていた。彼女なりのポリシーなのか、それともわけがあるのかは彼には分からなかったが、いわゆる変わった子だった。それでも美少女であることに変わりはなく、男子の間では人気がある。

「おまたせ！」

漆黒の夜空の下に真姫の声が響いた。午前三時すぎにして、彼女の声は元氣そのものだった。だが、体は満身創痍といった感じで服には砂埃が付着し、右手で腰をさすっている。

理由は聞くまでもなかった。

「仮にも女の子なんだから、もっとスマートな入り方ってもんがあるんじゃないか？」

真姫の状態を上から下まで走査し終えてから正司は言った。

目も当てられない、という大袈裟なものでもないが、もう少し上手いやり方があったのではないかと彼は思った。

「だって、柵が思った以上に高かったんだもん。それにこのスカートは長くてひっかかっちゃうし。困ったものだよね」

全ては予想以上に高かった柵と長すぎるスカートのせいで、自分は何も悪くないと言わんばかりの口調だ。

「もっと頭使って、裏門のほうから回るとかさ。あっちのほうが柵は低いだろ」

「そんなことしたら約束の時間に合わなくなっちゃうじゃん」
「ていうか、既に間に合っていないし」

「どれどれ……」

真姫は正司の腕を掴み、腕時計を覗き込んだ。

「なーんだ、たったの二〇分じゃん。正司は小さい男だねえ」

真姫の口調はとても悪びれている人間のそれではない。

正司は彼女のそんな性格を熟知しているため、あまり気にしないように努める。

「午前三時過ぎに、墓場で一人ポツンと待たされる俺の身にもなつてくれよな」

たかが二〇分。されど二〇分。

普段の正司ならば、その程度の遅刻についてうるさく咎めるようなことはないだろう。それも真姫の遅刻癖についてもはや彼は諦観の域に達しているのだ。だが、今日だけは事情が違った。ここは墓場で今の時刻は午前三時なのだ。そんな場所に一人で長々と居続けられるわけがない。それは幽霊など信じない巨漢のプロレスラーだろうと、例外ではないに違いない。正司はどちらかと言えば幽霊を信じる立場の人間なのだ。

「……はーん」

意味ありげな口調と意味深な目で真姫は正司を見つめた。その意味深な目には人を小馬鹿にした色が浮かんでいる。

「……なんだよ？」

含みのある彼女の言い方に対して訝しげな視線を送りつけた。

真姫は正司の訝しげな視線など意に介するような素振りも見せず、なめらかな動きで彼のすぐ目の前まで進み出ると、頭一つ低い位置から上目遣いで彼の顔を覗き込んだ。

「なっ——」

二の句が繋げられない。鼓動が早くなる。顔が熱い。

すぐ目の前に真姫の顔があり、気恥ずかしくて目のやり場に困った。だが、金縛りにかかったかのように、視線はすぐそこにある真姫の顔から外れなかった。

眼前に迫る彼女の顔を前にして正司は思った。

キスをする直前みたいだ。

彼はキスなど経験したことはなかったが。

「もしかして……」

真姫はグッと背伸びし、二人の顔は急接近した。両者の鼻先の間は数センチもない。

本気でキスを連想させる彼女の動きに彼は頭がくらくらした。

背伸びをした反動で揺れた彼女の麗しき黒髪からいい匂いが漂ってきた。その匂いは正司の鼻腔を優しくくすぐり、そして電光石火の如く脳天へと一直線に駆け抜けた。

午前三時にも関わらず、正司の眠気は一気に消し飛んだ。それは彼からしてみれば、世界中のどの眠気覚ましガム製造会社をも凌駕するほどの効能だ。

正司の中では彼女の肩を抱くべきか否か逡巡していた。

「私を待ってる間、ビビってた？」

「……へ!？」

「どうなのよ。ビビってたんでしょ!？」

正司の気が抜けたのは言うまでもない。

意識しないでやってたのか……？

思春期男子の淡い期待が見事に崩れ去った瞬間だった。

キスして誤爆しなくてよかったと思う反面、それはそれで悲しいものがあつた。もしも意識しないでやっているのだとしたら、彼は男として見られていないのも同然なのだ。

「可愛いねえ、正司ちゃんは」

彼が何も言えないでいると、彼女は無言を肯定と受け取ったのだろう。そう言って可笑しそうに彼女は笑うと、正司の二、三步先に立った。

「さて――」

真姫は右腕を勢いよく天に突き上げた。

「肝試しに出発!」

その行動と快活な声は暗くて不気味な墓場の雰囲気とは正反対のもので、真姫の周りにだけ光が降り注いでいるかのようにだった。

いつになく明るい月光に照らされた墓石たちが整然と立ち並ぶその光景は圧巻で、おのずと正司の中に畏怖の念を植え付けた。

歩を進める度に懷中電灯の光輪が揺れ動く。

光に照らされた墓石が怪しく光る。

吹き抜ける一陣の風が轟々と木々を揺らし、数多の木の葉が擦れ合つて不気味なメロディーを奏でていた。乾いたそのメロディーはひどく精神状態を不安にさせた。

正司の手を真姫の手が握った。彼女の手は小さくて、でも柔らかくて温かい手だ。

「怖いのか？」

伸びそうになる鼻の下に注意しつつ、彼は茶化するように彼女に尋ねた。

今の彼は幸せの絶頂にいた。今なら死んでも悔いはない、と思えるほどに。

「ば、バカ！ そんなんじゃないわよ。正司が怖くないように思つて、手を握つてあげてるのよ！」

そっぽを向いてそう弁解する真姫の頬に、パツと紅葉が散らされたかのごとく赤く染められているのが、月光に照らされてぼんやりと確認できた。その横顔は思わず息を吞んでしまいそうになるほど美しく、それでいて蒼白い月光のせいかどこか儚さを含んでいた。儚さ故に美しい、といったところだろう。

「そーかい、そりゃどうも」

「何よ、そのバカにした言い方は！？ 正司だって怖いくせに！」

「う、うるせえな！」

正司は今の自分の発言を後悔した。これでは凶星だと明らかに分かかってしまう。

「大丈夫だよ。正司は私が守ってあげるから」

真姫はまるで自分に言い聞かせるかのように小声で、それでいながら力強く呟いた。その呟きからは彼女の何やら固い決意が垣間見えた。

だが、そんなことを気にする間もなく正司はいつもの軽口を叩く。「ビビッてる奴に言われても、説得力に欠けるといいうか……」

「なっ——」

真姫の顔がさらに紅潮した。

「ビビッてなんかないもん！」

「嘘つけ」

「う、嘘じゃないんだから！」

そう言いつつも彼女の視線は明後日の方角に泳いでいる。正司は何も言わず彼女の手を握った。

そして二人は夜道を歩き出した。

山の天気は変わりやすい、という言葉が俗にあるが、山裾にあたるこの多摩村霊園も例外ではないのだろう。山の方から出張ってきた分厚い雲によって、月が覆い隠されてしまった。

月光が消えて辺り一面は暗闇に吞まれ、とうとう明かりは二人の懐中電灯だけになってしまった。更に悪いことに霧が発生したようだ。懐中電灯の光に水滴が反射している。

時間の経過と共に霧はどんどん濃くなっていき、今では視界が数メートル手前までしか確保できないような濃霧になっていた。足下に注意しないと転んでしまいそうだ。薄ぼんやりとしたシルエツトで墓石たちが脇を通り過ぎていく。

深夜の墓地。視界を奪う濃霧。正司の背中を冷たい汗が伝う。彼の恐怖のキャパシティは限界に近づいていた。

隣を歩く真姫はさきほどから黙りこくったまま歩いていた。とても今の彼女に対して『怖いのか？』などと尋ねる余裕はなかった。彼は一刻も早くこの墓地を抜け出したい気持ちで一杯だった。どんどん足早になる。

二人は無言のまま歩き続けた。

正司の心の中には、となりにいる真姫に話しかけたいという気持ちと、話しかけたくないという二つの気持ちが存在していた。彼女

に話しかけて返事が返ってくれば、正司は一人じゃないという精神的に楽になる。だが、彼女に話しかけてしまうことで、姿形の見えない得体の知れないやつらに、自らの居場所をバラすことになるかもしれない。彼自身その得体の知れないやつというのが、どういうものなのか分かっていなかったし、上手く言葉で表現することも出来なかった。だが、とにかくしゃべってはいけない、という気持ちが渦巻いていたのだ。

夏にしては冷やかな風が吹き抜け、一層大きく聞こえる樹木の不気味なさえずり。木々たちの声は不気味で、風の唸り声と混ざり溶け合い坩堝と化し、どこかファンタジックな異世界へ紛れこんでしまったかのような錯覚を植えつけた。

彼は走り出したい衝動に駆られたが、どうにか理性でそれを押さえつけた。無闇にこの濃霧の中を走り出せば、道に迷う危険性があった。そして、走り出した途端に許容限界ギリギリまで注がれた恐怖が一気に氾濫してしまいそうな気がした。

「ねえ、正司。あの光って何だと思う？　ちょうちんみたいだけど……」

久しく聞いた真姫の声色には恐怖の音階が帯びている。

無理もないことだと正司は思った。彼も彼女の手前でなければ逃げ出していたに違いないのだから。

濃霧の奥で薄ぼんやりと煌く淡いオレンジ色の球体を見た瞬間、

正司は猛然と走り出していた。

恥も外聞もなく、ただひたすら墓石の間を駆けた。どうにか悲鳴は漏らさずに済んだ。

日頃の運動不足ととばしすぎ、そして恐怖によって三分経たずして正司の心臓は悲鳴を上げた。これ以上走ることを拒絶した心臓をなだめるため、彼は立ち止まって膝に手をあて、口から肺へ酸素を

必死に送り込む。

「アレって、どう見ても、火の玉だろ……！」

正司は肩で大きく息をしながら、隣にいるはずの真姫に言った。

「なにが、ちょうちんだよ」

体内で暴れまわっていた心臓もだいぶ落ち着いてきた。

「真姫……？」

あれだけ走って息遣いの一つも聞こえない。それどころか、となりに彼女がいるかどうかすら怪しくなってきた。

真姫からの返答はない。そのときになって右手がやけに軽いことに気付いた。嫌な予感が彼の中を駆ける。恐る恐る自分の右手を見て、彼は予感が当たっていたことを知った。さきほどまで握っていたはずの彼女の左手がないのだ。

どうやら真姫とはぐれてしまったらしい。

FILE 01..ボーイ・ミーツ・ガール1 (後書き)

感想などありましたらお願いします。

FILE 01..ボーイ・ミーツ・ガール 2 (前書き)

これで第一話完結です。

FILE 01..ボーイ・ミーツ・ガール2

ここはどこだ……？

すでに視界を覆っていた霧は晴れ、月を覆っていた分厚い雲も消えていた。

正司は霧の中をどう歩いてきたのか分からなかったが、霧が消えた時にはこの広場にいた。広さは学校の校庭ほどで、地面には紐が張り巡らされている。

真姫のことも気がかりではあったが、今の正司には自分のことで手一杯だった。自分がどこにいて、どの方向に向かえばいいのかまったく見当がついていないのだから。まずはちゃんとした道を見つける必要があった。

「龍宮正司ですね？」

不意に名前を呼ばれ彼は硬直した。女の声だ。すぐさま注意深く周囲を見渡すが、辺りに人影はない。

「ククッ……私はこちらですよ」

幻聴ではないと言わんばかりに再び女の声が響いた。後方斜め上からだ。

「なっ——」

頭上を見上げた正司は絶句した。ほぼ真上に黒衣を身に纏った少女が空高く浮遊していたのだ。

無意識に向けた懐中電灯に少女のマントが怪しく煌いた。蒼白い髪の毛。そしてお世辞にも血色が良いとは言えない白い顔。スカートが微風になびいている。

幼さを残した少女は背丈や顔立ちからしてまだ一〇代前半に見えた。

「えっと、いちごパンツ……？」

風になびくスカートからいちごパンツが見え隠れしていたのだ。慌てて少女はスカートの裾を押さえる。だが、もう手遅れだった。すでに正司の脳内には彼女のいちごパンツが記憶されてしまった。恥ずかしそうに咳払いをして、彼女は再び口を開いた。

「もう一度訊くわ。あなたが龍宮正司ね？」

「そうだけど……」

少女の顔が微かに歪んだ。

「さすがマスター。作戦通りね。パンツのことは、冥土の土産ということで許してあげるわ」

「冥土の土産……？ なんのことだ？」

「じきに分かるわ。そうそう、自己紹介が遅れたわね。初めまして。わたしの名前は、ミリヤ。あなたの中にある賢者の欠片をもらってきたの」

「……賢者の欠片？ なんだそりゃ」

「あなたは知らなくてもいいことよ。知ったってどうすることも出来ないもの」

そう言って彼女は、楽しげに宙でくると一回転してみせた。遠心力でスカートが広がる。再びいちごパンツが見え隠れした。

「だから、もう話すことはないの。それじゃ、さようなら」

さようなら。帰路で友人と別れるときのような、そんな口ぶりだ。ミリヤは目を閉じ、なにやらぶつぶつと独り言を呟き始めた。何と言っているのか正司には聞き取ることは出来なかったが、彼女が呟き終える頃には掌にソフトボール大の紫色をした球体が置かれていた。正確に言えば少し浮かんでいる。その球全体を覆うようにして、明るい紫の気体が纏わりついていた。その気体は月明かりを透過して美しく煌いていた。

彼女は球体の置かれた右手の掌を正司にゆっくりと向ける。

「迷わず死んでね」

無邪気な笑顔での殺害予告だった。その言葉が引き金になったのか正司には分からなかったが、紫色の球体が彼に向けて発射された。

その球体は減速することなく、一直線に正司をめがけて飛んでいく。球体に纏わりつく明るい紫の気体は空気抵抗によって、まるで髪の毛のように球体のうしろでなびく。

正司と球体の距離が詰まる。彼の足は無意識のうちに動いていた。右に一步二歩。彼の脳は急げと命令するが足はそれに追いつかない。まるで他人の体みたいだ。

正司はそう思った。空回りもいいところで、彼の体が前のめりになる。地面が近づき、どうにか手をつこうと腕を伸ばした。その時だった。

ドンッ————

正司が先ほどまでいた場所を紫の球体が直撃し、そして大きな爆発を引き起こした。それに伴う衝撃波が彼を襲う。前のめりになっていた彼の体は一回点して地面に叩きつけられ、三メートルほどヘッドスライディングする羽目になった。

「うつ……」

もうもうと砂塵が立ち込める中、正司はゆっくりと体を起こした。ジーパンであったがために足に傷はなかったが、両腕と左頬にヘッドスライディングによる擦り傷が出来ていた。

振り返って自分がいた場所——着弾点を見た正司は絶句した。金魚のように口をぱくぱくさせ、言葉にならない空気の塊が吐き出される。

着弾点から煙とも土埃とも分らないものが月明かりに照らされて巻き起こり、さらに深さ四〇センチから五〇センチくらいで、直径二メートルはあろうかというクレーターが出来ていた。月のクレーターと比べれば小さなものだが、正司をすくみあがらせるには十分だった。

そのクレーターを見ていると足がガクガクと震えだした。強度不足で今にも地面に崩れ落ちてしまいそうだ。

「よく避けたわね。じゃあ、これならどう？」

ミリヤはまたしても目を閉じ、そしてぶつぶつと何か呟き始めた。そして、再び右腕を正司へと向ける。

逃げ出そうにも、すでに彼女は呟き終えていた。静かに目を開ける。

「今度こそ、迷わず死んでね」

その言葉と共に紫色の球体が現れ、そして勢いよく発射された。しかしさっきとは違い、一定の間隔で紫の球体が彼女の掌に生成され、そして正司に向けて放たれる。次も、その次も、どんどん生成されては紫色の球体が放たれる。最初の一撃が正司までの距離を詰めていた頃には、すでに一〇発近くの球体が空にあった。それも放たれた紫色の球体は全てが同じ軌道ではなく、一つずつバラけるようになっていて、一発目を避けたとしても、二発目以降の玉に当たってしまう。これだけの量をよけるのは不可能に近かった。

今の正司に出来ることはただ立ち尽くし、夜空を仰ぎながら最期の一瞬を待つことだけだった。今の正司の心の中を埋めているものは恐怖の二文字だけ。見上げる先には幾ばくかの星と、少女の放った無数の紫色をした球体。

彼女はそれだけでは飽き足らないのか、まだ掌から球体を作り出していた。

生きたいと思うことによって生じていた恐怖も、最期が近づくにつれて生に対して諦観の域に達したのか、次第に恐怖という気持ちが薄れていった。恐怖がなくなって正司の中には『もうすぐ死ぬんだな』という、あっさりとした気持ちしか残っていなかった。

意外とあれだな。辞世の句なんて出てこないものだな。

そんなことを考えているうちに、いよいよ球体が目の前に迫った。「諦めるにはまだ早いわよ！」

凜と響く女性の声。正司と球体の間に人影が立ちはだかった。「えっ？」

急に現れた人影。すらっとした体つきと声、そして長い髪の毛か

ら女であるということは明らかだった。背丈は真姫と変わらないくらいだが、銀砂の髪の毛が彼女ではないことを物語っている。透き通るような白い肌が印象的だった。

彼女は右手を高々と掲げる。

そして正司が口を挟む間もなく、インパクト。

蒼白い強烈な閃光が見えた刹那、少しのタイムラグがあつていくつもの激しい爆音が巻き起こった。でも、それだけだった。正司は爆発による熱や衝撃波はおろか、爆風すら感じることはなかった。爆発があつたのか彼は疑ってしまったが、あの爆音と轟々と立ちこめる砂塵が、爆発があつたことを告げている。

巻き起こった砂埃は風に乗って、正司たちを避けるように不自然な軌道で流れていく。そう、まるで見えない壁に隔てられているかのように。

「……どうなってるんだ？」

正司の前に立ち、はだかる彼女を中心として、半径二メートルほどの地面は何ともなかったが、その周囲にはいくつものクレーターが出来ていた。正司のいる場所が爆撃の中心であつたにもかかわらず、そこには一つも落ちていないのだ。

「間に合つてよかったわ」

正司の前に立ち、浮遊する少女の方を向いたまま彼女は言った。

正司と同様に体に外傷はない。銀砂の髪が揺れているだけだ。

「あんた一体――」

正司の頭に真っ先に浮かんだ疑問だった。

「話は後回しよ！……くるわ！」

そう少女が言い終えた次の瞬間には、正司は意図せず宙を舞っていた。華奢な体つきの少女がすばやく正司を抱え、後方に大きく跳躍したのだ。そのまま一〇メートルほど後退する。

ああ、こいつら普通の人間じゃないんだな。

正司は少女の腕の中でそんな悠長なことを考えていた。だが、すぐ目の前で球体が爆発し、そんな思考能力はあっさりと奪い取られて

しまった。

凄まじい爆風が正司と少女の髪をなぶる。

着地して正司を降ろした少女は、再び手を高々と少女に向けて掲げた。その所作に追隨するかのように、息苦しさを感じさせるほどの威圧感が彼女の小さな背中から発せられる。正司はその威圧感の前にして、瞬き一つすることさえ躊躇われた。まるで蛇に見込まれた蛙のように。

研ぎ澄まされ、ピンと張り詰めていく空気。

突然、ピリッと彼の体内を電流のようなものが駆け抜けた。痛みがあるわけではないものの、心地良い感じではない。

静電気……？

「あなたこそ——」

高々と掲げた少女の手が蒼白く輝き始める。その蒼白い輝きは徐々に形を球体に成していく。そしてゴルフボールくらいの小さな球体が彼女の掌で生を受けた。綺麗な円形の中心は白く輝き、そのまわりを薄っすらと蒼い光が装飾している。

少女の周囲からは、そのゴルフボールほどの球体に向かった蒼白い光が集まり、大きさはゴルフボールからテニスボールへ。さらに膨れ上がっていく。

「死になさい！」

バスケットボールほどの大きさになった球体は、バチチっという音を残し、一筋の光となって目にも止まらぬ速さで飛び出していった。それはまるでビームのように彼女の掌から放出され続け、ミリヤめがけてまっしぐらに空を駆け上がる。

少女の掌から繰り出されたビームは球体の時と同様に蒼白い光を放ち、多少ジグザグに屈折しながらも、最終目標であるミリヤに向かって突き進んでいく。それはまるで、落雷を巻き戻し再生しているかのような光景だった。

ミリヤまであと少しと迫り、このまま直撃するものと思われたが、彼女は寸前のところでそれを避けた。ビームは少女の後方へと逸れ

ていく。

「攻撃が甘いわよ？」

ミリヤのその言葉を目の前の少女は鼻で笑う。

「甘いのはあなたの方よ」

その悠然とした口調からは、攻撃を避けられたことに対する動揺や焦りは見られない。避けられるのは予想の範囲内だった、とでも言いたげだ。

「これで終わりよ！」

彼女の力強い言葉と同時に、後方に逸れていったビームが反転。再度、ミリヤに向かって宙を駆ける。しかし、彼女はそのことに気付いていない。ようやく気が付き、振り返った瞬間にはもう目の前に迫っていた。彼女の全身は蒼白い光に包まれ、頭を下にして落下する。

「飛行タイプには雷が有効。これって常套でしょ？」

「終わった……のか？」

「さあね」

そう言って彼女は肩をすくめてみせる。

「とんだ邪魔が入ったわね。まさか護衛がいるなんて予想外よ。世界魔法機構も手回しが早いこと。今日は一旦撤退するわ」

どこからともなく響くミリヤの声。だが姿は周囲にはない。

「逃げる気？」

「決着はいずれどこかで……」

それきりミリヤの声は消えてしまった。

「終わったのか？」

正司は再び少女に尋ねた。

「とりあえずはね」

その言葉に正司はべたりと地面に腰を下ろす。

「大丈夫？」

慌てて少女が正司に手を差し出した。

「まあ、なんとか生きてはいるな。……ところで、あんたは一体、

何者だ？」

「何者って言われても、簡単には説明できないわね。でも、ただの通りすがりの人ってわけでもないわ。とにかくここは一旦、場所を変えましょうか。まだ近くに敵が居るかもしれないしね。それからでも話は出来るわ」

差し出された彼女の手を借りるにも癪なので、正司は自力で立ち上がる。

「それじゃ、行きましょう」

「どこに？」

「あなたの家よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5462f/>

フラグメント！

2010年10月28日06時46分発行